〔短歌〕

しろがねの歳月

島田修三

ふと思ふこともなけれど見返れば廊下に西日射しゐるばかり

生けるまま朽ちゆくごとしピラルクのものうき丸太は淪(しづ)む汚水に

おろかなる正攻法が俺はイヤで乃木希典はニンジンぎらひ

うぐひすの鳴くこゑあらぬ春あはれ静かに錆びて子の三輪車

朝かげのなかなるソファに沈みしが俺ともつかぬ体臭しるき

五月はや半ばも過ぎぬと呆れつつ2Bの鉛筆チビたるを走らす

青年と飲みてをりしが魔のごとき津波のごとき悲しみは来つ

長き長き睡りより醒め右の手のたなごころをぞ茫と見てをり

夢の淵にさすらふごとき日常の濃き果実酒をなめつつ酔はず

うつくしき航空母艦のシルエットを堪能したれ昼飯(ひる)忘れつつ

夕暮れの床に落ちたる釦ひとつコツと響きてゆくへ知らずも

あはれ俺の怒りは静かに揮発して鰡の照焼きひたくらふなり

妻がゐず子がゐず独りを愉しめば巨(おほ)いなるかなや暁積乱雲(あけせきらんうん)

少年のわがたぎつ瀬に跳ねてゐしあはれ若鮎少女らいづこ

力なき貧しき午睡ゆ醒めてのち鬼灯ふふめば鬼灯は鳴らず

唐突に秋の来てゐる午後にして歯には冷たし海苔にぎり飯

畢らむとするしろがねの歳月やあきかぜに濡れ夕坂をくだる

歌による救済はあらな涼しげにフランクフルト学派はそよげる

なぜ嗤ふなぜ嫌ふかとしやがれごゑ耳に残りてあかつきを醒む

夕茜しばらく西にとどまりて郷愁のごとし越後湯の煙突